

田舎

マルセル・プレヴォー Marcel Prevost

森鷗外訳

青空文庫

脚本作者ピエエル・オオビュルナンの給仕クレマンが、主人の書斎の戸を大切に開いた。ちようど堂守が寺院の扉を開くような工合である。そして郵便物を載せた銀盤を卓の一番端の処へ、注意してそつと置いた。この銀盤は偶然だが、實際ある寺院で使つていたロオマ時代の器具であつた。卓の上には物を書いた紙が一ぱいに散らばつていて、ほとんど空地が無い。それから給仕は来た時と同じように静かに謹んで跡へ戻つて、書斎の戸を締めた。開いた本を閉じたほどの音もさせなかつたのである。

ピエエル・オオビュルナンは構わずに、ゆつくり物を書いてゐる。友人等はこの男を「先生」と称している。それには冷かす心持もあるが、たしかに尊敬する意味もある。この男の物を書く態度はいかにも規則正しく、短い間を置いてはまた書く。その間には人指し指を器械的に脣の辺まで挙げてまた卸す。しかし目は始終紙を見詰めている。

この男がどんな人物だと云うことは、一目見れば知れる。態度はいかにも威厳があつて、自信力に富んでいるらしい。顔は賢そうで、煎じ詰めたようで、やや疲労の気色を帯びている。そう云う態度や顔に適つてゐるのはこの男の周囲で、隅から隅まで一定の様式によつて、主人の趣味に合うように整頓してある。器具は特別に芸術家の手を煩わして図案を

させたものである。書架は豊富である。Bibelsと云う名の附いている小さい装飾品に、硝子鐘しょうししょうが被せてある。物を書く卓の上には、貴重な文房具が置いてある。主人ピエエルが現代に始めて出来た精神的貴族社会の一員であると云うことは、この周囲を見て察せられる。あるいは精神的富豪社会と云った方が当たっているかも知れない。それはどんな社会だと云うと、国家枢要の地位を占めた官吏の懷抱している思想と同じような思想を懷抱して、著作に従事している文士の形づくっている一階級である。こう云う文士はぜひとも上流社会と同じような物質的生活をしようとしている。そしてその目的を遂げるために、財界の老鍊家のような辣腕らつわんを揮つて、巧みに自家の資産と芸能との遺繰やりくりをしている。昔は文士を〔bohem〕だなんと云ったものだが、今の流行にはもうそんな物は無い。文士や画家や彫塑家の寄合所になつていた、小さい酒店が幾つもあつたが、それがたいてい閉店してしまつて、そこに出入していた人達は、今では交際社会の奢つた座敷わじに出入している。新進文士でも二三の作が少し評判がいいと、すぐに住いや暮しを工面する。ちよいと大使館書記官くらいな体裁にはなつてしまふ。「当代の文士は商賈の間に没頭せり」と書いた Porto-Riche は、実にわれを欺かずである。

ピエエル・オオビュルナンは三十六歳になつてゐる。鬚を綺麗に剃つてゐる。指の爪と

斬髪頭とに特別の手入をしている。衣服は第一流の裁縫師に^{こしら}えさせる。冷水浴をして、
 portに熱中する。昔は Monsieur de Voltaire, Monsieur de Buffon だなんと云つて、ロオマン
 チツク派の文士が冷かしたものだが、ピエエルなんぞはたしかにあのたちの貴族的文士の
 再来である。

オオビュルナン先生は最後に書いた原稿紙三枚を読み返して見て、あちこちに訂正を加
 え、ある詞^{ことば}やある句を筆太に塗沫^{とまつ}した。先生の書いているのは、新脚本では無い。自家の
 全集の序である。これは少々難物だ。

余計な謙遜はしたくない。骨を折つて自家の占め得た現代文壇における地位だけは、婉^え
 曲^{きよく}にほのめかして置きたい。ただしほのめかすだけである。傲慢に見えてはならない。
 ピエエル・オオビュルナンは満足らしい気色で筆を擱^おいた。ぎごちなくなつた指を伸ば
 して、出そうになつた欠^{あぐび}を噛み潰した。そしてやおらその手を銀盤の方へ差し伸べた。盤
 上には数通の書簡がおとなしく待つていたのである。

ピエエルは郵便^えを選び分けた。そしてイソダン郵便局の消印のある一通を忙^せわしく選り
 出して別にした。しかしすぐに開けて読もうともしない。

オオビュルナン先生はしずかに身を起して、その手紙を持って街に臨んだ窓の所に往つ

て、今一応丁寧に封筒の上書を検査した。窓の下には幅の広い長椅子がある。先生は手紙をその上に置いて自身は馬乗りに椅子に掛けた。そして気の無さそうに往来を見卸みおろした。

ちょうど午後三時である。Rue de la Faisanderieの大道は広々と目の下に見えていて、人通りは少い。ロンドンの上流社会の住んでいる市区によくこんな立派な、幅の広い町があるが、ここの通りはそれに似ている。

ピエエル・オオビュルナンは良久やみぐさしく物を案じている。もうよほど前からこの男は自己の思索にある節制を加えることを工夫している。神学者にでも言わせようものなら、「生産的静思」なんぞと云うだろう。そう云う態度に自身を置くことが出来るように、この男は修養しているのである。オオビュルナン先生はこんな風に考えている。もっともそれは先生だけの考えかも知れない。文人は年を取るにしたがって落想が鈍くなる。これは閱歴の爛熟したものの免れないところである。そこで時々想像力を強大にする策を講ぜなくてはならない。それには苟くいやしも想像力にうぶな、原始的な性能を賦ふし、新しい活動の強みを与えるような偶然の機会があつたら、それを善用しなくてはならないと云うのである。

しかるにこのイソダンの消印のある手紙は、幸にもその暗示的作用を有する機会の一つであつた。先生はこの手紙が自己の空想の上に、自己の霊の上に、自然に強大に感作する

のを見て、独り自ら^{たの}娛しんでいる。

この手紙を書いた女はピエエル・オオビュルナンの記憶にはつきり残っている。この文字はマドレエヌ・スウルヂエエの手である。自分がイソダンで識っていた時は未亡人でいた美人である。それが自分のパリーに出たあとで再縁して、今ではマドレエヌ・ジネストと名告^{なの}っている。スウルヂエエにしろ、ジネストにしろ、いずれも誰にも知られない平民的な苗^{みょうじ}字で目下自分の交際している貴夫人何々の名に比べてみれば、すこぶる殺風景である。しかしこの平民的な苗字が自分の中心を聳^{しょうどう}動して、過ぎ去った初恋の甘い記念を喚び起すことは争われない。

その時のピエエルは高等学校を卒業したばかりで、高慢なくせにはにかんだ、世慣れない青年であった。丈は不吊^{ふつり}合に伸びていて、イギリス人の a long lad なんぞと云うたちである。金は無い。親を亡くした当座で、左の腕に喪章を附けている。その時のマドレエヌはどうであつたか。栗色の髪の毛がマドンナのような可哀^{かわい}らしい顔を囲んでいる若後家である。その時の場所はどんな所であつたか。イソダンの小さい客間である。俗な、見苦しい、古風な座敷で、椅子や長椅子には緋の天鵝絨^{びろうと}が張つてある。その天鵝絨は物を中に詰めてふくらませてあつて、その上には目を傷めるような強い色の糸で十文字が縫つてあ

る。アラバステル石の時計がある。壁に塗り込んだ煖炉の上に燭台が載せてある。

ピエエル・オオビュルナンはこんな光景を再び目の前に浮ばせてみた。この男はそう云う昔馴染の影像を思い浮べて、それをわざとあくまで霊の目に眺めさせる。そうして置けば、それが他日物を書くときになつて役に立たぬ氣遣いは無い。それからピエエルは体を樂にして据わり直して、手紙を披ひらいて讀んだ。

イソダン。五月二十三日。

なぜわたくしは今日あなたに出し抜けに手紙を上げようと決心いたしましたのでしょうか。人の心の事がなんでもお分かりになるあなたに伺うかがつてみたら、それが分かるかも知れません。わたくしこれまで手紙が上げたく思いましたのは、幾度だか知れません。それでいて、いざとなると、いつも大胆に筆を取ることが出来なくなっていました。今日は余り大胆な事をいたすことになりましたので、わたくしは自分で自分に呆れています。さて、当前なら手紙の初めには、相手の方を呼び掛けるのですが、わたくしにはあなたの事を、ど

う申上げてよろしいか分かりません。「オオビュルナン様」では余りよそよしゅうございます。「尊い先生様」では氣取つたようで厭でございます。「愛する友よ」とか、「愛するピエエルよ」とか申すのでしょうか。どうもそんなのがちようどよろしいかと存ぜられます。ですけど、頭からそう申す事は、余り不躰ぶしつけなよう出来かねます。だんだん書いてまいりますうちに、そんな事も申されるようになりますかも知れません。

あなたがわたくしの事を度々思い出して下さるだろう、そしてそれを思い出すのを楽しみにして下さるだろうなんぞとは、わたくしは一度も思つた事はございません。あなたはあんまり御用がおりになつて、あんまり人に崇拜せられていらつしやるのですもの。あなたが次第に名高くおなりになるのを、わたくしは蔭ながら胸に動悸をさせて、正直に心から嬉しく存じて傍ぼうかん看かんいたしていました。それにひっきりなしに評判の作をお出しになるものですから、わたくしが断えずあなたの事を思わせられるのも、余儀ないわけでございます。こうは申しますが、実はあんな夢のような御成功が無かつて、大切なる友よ、わたくしはあなたの事を思わずにはいられませんのでした。御覧なさい。あなたをお呼掛け申しまする、お心安立ての詞ことばを、とうとう紙の上に書いてしまいました。あれを書いてしまいましたので、わたくしは重荷を卸したような心持がいたします。それにあなたがわ

たくしの所へいらつしやった時の事を、まるでお忘れになるはずは無いように、わたくしには思われてなりません。高等学校を御卒業なさいまして、誰とも交際なさらずに、寂しく暮らしていらいしやる時の事で、毎週木曜日と日曜日とは、きつとおいでなさいましたのね。あの時はまだお父う様がお亡くなりなすって、お母あ様がお里へお帰りになつた当座でございましたのね。それだもんですから、イソダンであなたの御交際なさることの出来ましたのは、御両親を存じていたわたくしだけでございましたわ。

大切な友よ。あの時がわたくしにとっては、どんなに幸福な時でございましたしやう。本当にお互に物馴れない、窮屈らしい御交際をいたしました事ね。あの時邪魔の無い所で、久しく御一しよにいますうちに、あなたの人にすぐれていらつしやること、珍らしい才子でいらつしやること、何かなさるのに思い切つて大胆に手をお下しになることなんぞが、わたくしにはよく分かりましたので、わたくしはあなたをえらい方だと存じましたの。それなのにあなたは大きななりをして、はにかんでばかりいらつしやったのですもの。それは六つも年上の若後家の前だからでございましたのね。六つ違いますわねえ。おまけに男のかたが十七で、高等学校をお出になったばかりで、後家はもう二十三になっているのですから、その六つが大した懸隔になったのも無理はございませんね。そんな風にして

いましたから、人の世話ばかり焼くイソダンの人達も、わたくしの所へあなたのいらつしやるのをなんとも申さないで、あれは二親の交際した内だから尋ねて往くのだと申ししていましたのです。

しかしわたくしがそんな気でいましたから、あなただつてそう思つていらつしやつたでしょう。二人は内々恋で逢う心持をしていましたのね。本当にあの時は楽しい時でございました事。わたくし今だから打明けて申しますが、あの時が私の一生で一番楽しい時でございましたの。あの時の事をまだ覚えていらつしやつて。あなたのいらつしやる時とお帰りになる時とにあなたが子供でいらつしやつた時からの習慣で、わたくしはキスをしてお上げ申しましたのね。それはもと姉が弟にするキスであつたのに、いつか温い感じが出て来ましたのね。次第に脣と脣との出合つたのが離れにくくなりますのを、わたくしはわざと自分でも気に留めないようにしていましたの。そして手の震えるのをお互に隠し合うようにしていましたつけね。

そのうちお互に何も口に出さずにいて、とうとうあなたは土地を離れておしまいなさいました。それはあなたははにかんでいらつしやる、わたくしはあなたを預託品よたくひんのように思つていましたからでございます。一体わたくしは前から堅気な女で、今でも堅気にいる

のでございますの。

お別れにお互に涙をこぼしたことは、まだ覚えていらつしやつて。お互に口に出さないつらさを感じましたわね。

それだのにあなた、パリイにいらつしやつてから、すぐにわたくしの事をお忘れなさいましたのね。お手紙はたった四度しか参りませんでした。それから勲章をお貰いになつたお祝を申上げた時、お葉書を一度下さいましたつけ。それにわたくしはどうでございましょう。

わたくしはあなたの記念を心の隅の方に、内証で大切にしまつて置いて、昔のようになんの幸福もなしに暮らしていました。それからわたくしは二度目に結婚いたしました。これまで申上げると、わたくしはこの手紙を上げる理由を御話申さなくてはなりませんから、その前に今の夫の事を申しましょう。格別面白いお話ではございませんから、なるたけ簡略に致します。ジネストは情なしの利己主義者でございます。けちな圧制家でございます。わたくしは万事につけて、一足一足と譲歩して参りました。わたくしには自己の意志と云うものがございます。わたくしは持前の快活な性質を包み隠しています。夫がその性質を挑発的だと申すからでございす。わたくしはただ平和が得たいばかりに、自己の個人

性を全滅させました。それが大失錯で、夫の要求は次第に大きくなるばかりでございませう。今日のところでは、わたくしは主人に屈従している賄方のようなものでございませう。そう云う身の上は余り幸福ではございませうね。それでもわたくしは主人が渡世上手で、家業に勉強して、わたくし一人を守っていてくれるのをせめてもの慰めにいたしていました。しかしそれはわたくしがひどく騙されていたのでございませう。ある偶然の出来事から、わたくしはそれを発見いたしました。夫はある日机の抽斗ひきだしに鍵を掛けることを忘れたのでございませう。リユやブリュクセルやパリイに、夫は昔馴染を持っていて、わたくしと一しよになつてからも、始終その関係を断たずにいたのでございませう。

わたくしはすぐに頼附けの弁護士の所へまいつて、離婚願を出して貰おうかと存じました。しかしわたくしだけが知っている事を、イソダンの人達に皆知らせるのが厭になつて、わたくしは羞恥の心から思い留まりました。夫は取引の旅行中にその女どもに逢つていますので、イソダンでは誰も知らずにいるのでございませう。

そこでわたくしはどういたしたらよろしいのでございませう。それについて誰に相談いたしませう。決してこの土地の人には打明けたくございませう。

そんならパリイには誰がいるかと云うと、あなたより外に知つた方はありません。

あなたはわたくしの相談相手になって下さらないわけには参りますまい。わたくし自身に分からない事までも、あなたにはお分かりになりましょう。あなたはお職業柄で女の心を御承知でいらつしやるはずでございますからね。それにあなたは世間の事をよく御承知で、法律にもお精しいことを承知いたしています。わたくしは万事打明けてお願申すつもりでございます。わたくしの幸福と申すのは可笑おかしゆうございますが、わたくしの平和は、あなたのためにも、どうでもよろしい物ではございますまい。

どうぞあなたの貴重な時間の十五分間をわたくしに御割かつあ愛あいなさつて下さいまし。ちょうど夫は取引用で旅行いたしました、五六日たたなくては帰りません。明晩までに、差出人なしに「承知」と云う電信をお発し下さいましたら、わたくしはすぐにパリイへ立つことにいたしました。済みませんが、も一つお願いがございます。御親切ついでに、どうぞあなたの方からお尋なすつて下さいまし。あなたのお住いへ伺うことは憚はばりますのですから。わたくしはただいまから頼んでおいて Rue Romaine 十八番地に落ち着きますことにいたします。

わたくしはこんなに手短に乾燥無味に書きます。これは少し気分が悪いからでございます。電信をお発し下すつたなら、明後日午後二時から六時までの間にお待受けいたします。

が出来ましょう。もうこれで何もかも申上げましたから、手紙はおしまいにいたしました。う。わたくしはきつと電信が参る事と信じています。どうぞこの会合をお避けなさらないで、わたくしに失望をおさせなさらないように、くれぐれもお願申します。わたくしはあなたにお目に掛かつて、それをたよりにこれからさきの生活を続けようと存じています。それからどうぞ今はいけないから後にしろなんぞとおっしゃらないで下さいまし。御承諾下さるつもりで、前もつてお礼を申上げます。もうこれでも大ぶ貴重なお時間をお潰させ申しましたでしょうね。

マドレエヌ

わたくしにお逢いになりました、そう大して更けたようには御覧なさいませんでしよ
うと存じますの。年の割に顔も姿も変わらないと、皆がそう申しますの。これで体は大切に
いたして、更けない用心をいたしていますの。でも夫の心は繋ぎ留めることが出来ません
でしたの。

翌日の午後二時半にピエエル・オオビュルナンは自用自動車の上に腰を卸おろして、技手に声を掛けた。「ド・セエヴル町とロメエヌ町との角までやってくれ」

返事はきのうすぐに出してある。それは第一に、平生紳士らしい行動をしようと思つていて、近ごろの人が貴夫人に対して、わざとらしいように無作法をするのに、心から憤つていたからである。第二にはジネストの奥さんの手紙が表面には法律上と処世上との顧問を自分に託するようであつて、その背後に別に何物かが潜んでいるように感じたからである。無論尋常の密会を求める色文では無い。しかしマドレエヌは現在の煩悶のがを遁れて、過去の記念の甘みが味いたいと云う欲望をほのめかしている。男子の貞操を守っていない夫に対して、復讐がしてやりたいと云う心持が、はつきり筆に書いてはないが、文句の端々に曝露している。それに受身になつて運命に左右せられていないで、何か閱歴がしてみたといふ女の氣質の反抗が見えている。要するにどの女でも若い盛りが過ぎて一度平靜になつた後に、もうほだなく老が襲つて来そうだと思つて、今のうちにもう一度若い感じを味つてみたいと企てる、ちよいとした浮氣の発動が、この女の上にもめぐつて来ているのだと認めたのである。あの手紙にはこの方面の事は文章の上に少しも書いて無い。しかしそれがかえつてこう云う状態の存在を証明しているように思われた。

すべて女の手紙を読むには、行の間を読まなくてはならない。眼光紙背に徹せなくてはならない。ピエエル・オオビュルナンは得意の作の中にこう書いた事がある。「女の手紙の意味は読んで知れるものではない。推測しなくてはならない。たいていわざと言わずにあるところに、本意は潜んでいるものである。」

マドレエヌの手紙の中で、一番注意してみなくてはならぬ処は二白にはくである。法律顧問を託する女が媚こびを呈するような態度で、顔がどうなったの、姿がどうなったのと云うはずが無い。

自動車がセエヌ河に沿うて走る間オオビュルナンはこんな事を考えた。「三十三年に六年を足せば三十九年になる。マドレエヌは年増としてはまだ若い方だ。察するに今度のよくな突飛な事をしたのは、今に四十になると思ったからではあるまいか。夫が不実をしたのなんのと云う気の毒な一条は全然虚構であるかも知れない。そうでないにしても、夫がそんな事をしているのは、疾とうから知っていて、別になんとも思わなかったかも知れない。そのうち突然自分が今に四十になると云うことに気が附いて、あんな常軌を逸した決心をしたのではあるまいか。」これはちと穿鑿せんさくに過ぎた推論である。しかしこんなのが女にありそうな心理状態だと思うと、特別の面白みがある。

ピエエル・オオビュルナンはわざとらしく口の内ですぶやいた。「ああ。そんな事はどうでもいいのだ。十六年前の事を思つてみると、あのマドレエヌと云う女は馬鹿に美しい女だった。それが大して變つていないとすると。」これまで言つて、あとはなんとも云わなかった。心の内でもそのあとは考えなかったのである。オオビュルナンは女に逢うに、どうしようと云う計画を立てたことが無い。今の世の人情で判断すれば、この男はまだ若いと云つていい。しかしもうあまたの閱歴、しかも猛烈な閱歴を持つてゐるから、小説らしい架空な妄想には耽らない。この男はきちんと日課に割り附けてある一日の午後を、どんな美しい女のためにでも、無条件に犠牲に供せようとは思わない。この心持は自分にもはつきり分かつてゐる。そんなら何が今でもこの男に興味を感じさせるかと云うと、それは女が自分のためにのぼせてくれるのを、受身になつて楽しむところに存する。エピクロス派の耽美家が初老を越すと、相手の女の情欲を芸術的に研究しようとする云う心理的好奇心より外には、もうなんの要求をも持つてゐない。これまでのこの男の情事は皆この方面のものに過ぎなかった。それがもう十年このかたの事である。

ピエエル・オオビュルナンはそんな風にこれまで相手にした女とまるで違つたマドレエヌに逢つて、今度こそどんな心持がするか経験してみようと思つてゐる。それが心の内で

秘密な歓喜として感ぜられる。マドレエヌは本当の田舎の女である。そして読書に飽きたオオビュルナンの目には Balzac が小説に出る女主人公のように映るのである。

そこへまた他の一種の感情が作用する。それはやや高尚な感情で、自分の若かった昔の記念である。あの頃の事を思ってみれば、感情生活の本源まで溯って行く道がどんなにか平坦であつただろう。その恋しい昔の活きた証人ほど慕わしいものが世にあらうか。まだ人生と恋愛とが未来であつた十七歳の青年の心持に、ただの二三十分間でもいいから戻つてみたい。あのマドレエヌに逢つてみたらイソダンで感じたように楽しい疑懼ぎくに伴う熱烈な欲望が今一度味わはすまいか。本当にあのマドレエヌが昔のままで少しも変らずにいてくれればいい。しかし自分はどうだろうか。なに、それは別に心配しなくてもいい。もちろん髪の毛は大ぶ薄くなつて、顔のそこに皺しわが出来たが、その填うめ合あせにはあの時のようにはにかみはしない。それから立居振舞も気が利いていて、風采も都人士みやびめいている。「それに第一流の大家と来ている」と、オオビュルナンは口の内うちで詞ことばに出して己おのを嘲あざつた。

自動車が止まった。オオビュルナンは技手に待っていると云つて置いて、しずかに車を下りてロメエヌ町へ曲がつた。小さい、寂しい横町である。少数の職業組合が旧教の牧師

の下に立つて単調な生活をしていた昔をそのままに見せるこう云う町は、パリイにはこの辺を除けては残っていない。指定せられた十八番地の前に立つて見れば、宛然たる田舎家である。この家なら、そっくりこのままイソダンに立つていたって、なんの不思議もあるまい。町に面した住いは低く出来ていて、入口の左右に小さい店がある。入口から這入る所は狭いベトンの道になっていて、それが綺麗に掃除してある。奥の正面に引込んだ住いがある。別荘造りのような構えで、真ん中に広い階段があつて、右の隅に寄せて勝手口の梯が設けてある。家番に問えば、目指す家は奥の住いだと云った。

オオビュルナンは階段を登つてベルを鳴らした。戸の内で囁く声と足音とがして、しばらくしてから戸が開いた。出て来たのは三十歳ばかりの下女で、人を馬鹿にしたような顔をして客を見ている。

「ジネストの奥さんはおいでかね。」

下女は黙つて客間の口を指さした。オオビュルナンはそこへ這入った。室内装飾は有りふれた現代式である。白地に文様のある紙で壁を張り、やはり白地に文様のある布で家具が包んである。木道具や窓の龕が茶色にくすんで見えるのに、幼稚な現代式が施してあるので、異様な感じがする。一方に白塗のピアノが据え附けてあつて、その傍に Liberty の

薄絹を張った硝子戸ガラスドがある。隣の室に通じているのであろう。随分無趣味な装飾ではあるが、住心地の悪くなさそうな一間である。オオビュルナンは窓の下にある気の利いた細工の長椅子に腰を掛けた。

オオビュルナンは少し動悸がするように感じて、我ながら、不思議だと思った。相手の女が同じ人であるだけに、過ぎ去った日のあらゆる感情が復活して来たのだろうか。今の疑懼ぎくの心持は昔マドレエヌの家の小さい客間で、女主人の出て来るのを待ち受けた時と同じではないか。人間の記憶は全く意志の掣せいちゆう肘を受けずに古い閱歴を堅固に保存して置くものである。そう云う閱歴は官能的閱歴である。オオビュルナンはマドレエヌの昔使っていた香水の匂い、それから手箱の蓋を取って何やら出したこと、それからその時の室内の午後の空気を思い出した。この記念があんまりはつきりしているので、三十三歳の世慣れ切った小説家の胸が、たしかに高等学校時代の青年の胸のように躍った。ただ昔と今と違っているのは、今はそのあらゆる感動が一々意識に上って、他日筆にする材料として保存せられるだけである。

突然オオビュルナンは物に驚いて身を振り向けた。そつと硝子戸を開けたような音がしたのである。しかしそれは錯覚であつたとみえて、誰も室内へ這入って来てはいない。オ

オビユルナンは起ち上がって、戸の傍へ歩み寄った。薄絹が少し動いたようではあるが、何も見えない。多分風であつただろう。

オオビユルナンは口の内ですぶやいた。「これでは余り優待せられると云うものではないな。もうかれこれ二十分から待たせられている。どうしたと云うのだろう。事によつたら馬鹿な下女奴^{げじよめ}が、奥へ通さずにしまったのではないかしら。とにかくまあ、待っているでしょう。や、来たな。」最後の一句は廊下に足音が聞えたから言つたのである。その足音はたしかに硝子戸に近づいて来る。オオビユルナンは覺えず居ずまいを直して、蹙^{しか}めた顔を元に戻した。ちょうど世話物の三幕目でいざと云う場になる前に、色男の役をする俳優が身繕^{みつくろ}いをする^をと云う体裁である。

はてな。誰も客間には這入つて来ない。廊下から外へ出る口の戸をしずかに開けて、またしずかに締めたらしい。中庭を通り抜ける人影がある。それが女の姿で、中庭から町へ出て行く。オオビユルナンはほつと息を衝^ついた。「そうだ。マドレエヌの所へ友達の女が来ていてそれがやつと今歸つて行つたのだな。」こう思つてまた五六分間待つた。そのうちそろそろ我慢がし切れなくなつた。余り人を馬鹿にしているじやないか。オオビユルナンはどこかにベルがありそうなものだ、と、壁を見廻した。

この時下女が客間に来た。頬つぺたが前に見た時より赤くなっていて、表情が前に見た時より馬鹿らしく見えている。そして黙つて戸のきわ際に立っている。

客のことば詞には押え切れない肝かんしやく癩の響がある。「どうしたのだね。妙じやないか。ジネストの奥さんに、わたしが来て待つているとそう云つたかね。ええ。」

下女は妙な笑顔をした。「あの、奥さんがお客様にお断り申してくれとそうおっしゃいました。」

「ええ。どうも分からないな。お断り申せとはどう云うのだね。奥さんはおいでになるが、お逢いにならないと云うのかい。」

「いいえ。奥さんはよんどころ抛ない御用がおりなさいますので、お出掛けになりました。いずれお手紙をお上げ申しますとおっしゃいました。」こう云つてしまつて、下女は笑声を洩した。

オオビュルナンははつと思つて、さつき中庭を通つて町へ出た女の事を思い出した。

「あれがマドレエヌだったのか。」このひとりごと独言が自分の耳に這入つて、オオビュルナンはようよう我に帰つた。そして怒気を帯びて下女の前に一步進んだ。下女は驚いて覚えず壁際まで跡しぎりをした。「奥さんにそう云つてくれ。お手紙には及びません。どうぞお

構い下さらないようにとそう云ってくれ。」こう言い放ってオオビュルナンは客間を出た。脚本なら「退場」と括弧の中に書くところである。最も普通の俳優はこんな時「それではあんまり不自然で引つ込みにくいから、相手になんとか言わせてくれ」と、作者に頼むのが例になっている。

愛する友よ、あなたがもう返事をするには及ばないから、構ってくれるなど御申置なさいました事は、たしかに承知いたしています。御察し申しまするに、あなたはわたくしのいたした事を無責任極まる所為だと思召して、ひどくご立腹になっていらつしやいますのでしよう。自分で顧みて見ましても、わたくしのいたした事は余り気の利いた所為だとは申されません。全く子供らしい振舞だったと申してもよろしいかも知れません。しかしそれは一昨日あなたに御挨拶をいたさずに逃げ出そうと決心いたしたのが子供らしいと申すのではございません。それはわたくしが最初あなたに手紙を差上げて御面会がいたしたい、おいでを願いたいと申したのが子供らしいと申すのでございます。

こう申上げるのをお信じ下さいますでしょうか。どうも覺束のうございますね。わたくしはあなたの女の手紙は云々とお書きになったあの御文章を承知いたしています。最初の手紙を差上げる時も、あの「格言」が気になつてなりませんでした、今度は前よりも一層心苦しゅうございます。

女の手紙は書いてある文句よりは、行と行との間に書かずにある文句を読まなくてはならないと云うのは、本当の事でございましょう。それから一番大切な事が書かずにあると申すのも本当でございましょう。しかしそれはわざと書かないのではございけません。自分でもする事の本当の動機を知らずにいることもございますし、またその動機がたいいてい分りそうになつて来ていても、それを自分で認めるだけの勇氣が無いこともございます。そう云うわけですから、わたくし達の手紙はやはりわたくし達の靈をありのままに現していると思つてもよろしゅうございましょう。手紙には自分がこうだと思つてゐる通りが出ています。する事や書く事の上をおお掩つてゐる薄絹は、はたから透かして見にくいと申すよりは、自分で透かして見にくいと申すべきでございましょう。

わたくしの最初に差上げた手紙を例にして申しましょう。わたくしはあなたに誓つて正直なところを申します。わたくしの意志は、あなたにまたお目に掛かつて、御相談がいた

したい、ただのお話もいたしたい、なんでもあなたがそうしろとおっしゃる通りにいたしてみたい、昔の御交際を喚び戻したいと云うだけでございました。そういたしたら、今の苦しい心持を和げることが出来よう、わたくしはそこに安心を得ることが出来ようと存じたのでございます。こう云う意志であの手紙は書いたのでございます。そして一昨日までは自分でもたしかにそうだと信じていました。ただあとから考えてみますと、あの手紙の末に書き添えました事だけが、いかにも不謹慎なようでございます。しかしあれは手紙が出来てしまつてから、ふいと器械的に書いたのでございます。あのわたくしの顔がどうの姿がどうのと書きました、あの文句でございますね。

あなたは心理学者でいらつしやるから、そう思召しますでしょうが、あれなんぞが本当に女らしいいたしかたではございませんか。女と云うものは本当に衝動的なものでございますね。わたくし達は衝動に騙だまされて、咄嗟とつさの間にいろんな事をいたします。そしてその時はその動機を認めずにいるのでございます。それを男の方が狡こう猾かつだとおっしゃるのでございます。

そこであの手紙を差上げます。電報の御返事が参ります。女中を連れてパリイへ出て、ロメエヌ町の家に落ち着いて、あなたを御待ち受け申します。その時も多少興奮いたして

いるようではございましたが、自分のする事が心配になるとか、気づかわしいとか云うことはございませんでした。興奮いたしているとは存じましても、それがあなたに恋をしているからだなんぞとは思いませんでした。とうとうわたくしは恋と云う字を書いてしまいました。これを書いてしまえば、わたくしは重荷を卸したと申ししましてもよろしゅうございます。もうこれでわたくしがあなたを騙したのだとはおっしゃいますまい。わたくしは安んじて恋と云う字を書きます。私の申しわけ、わたくしの取留めの無い挙動の申しわけはこの一字に在るのでございます。

ピエエルさん。わたくしはただいま白状いたします。わたくしはもう十六年前にあなたに恋をいたしていました。あなたが高等学校をお出になったばかりの世慣れない青年でいらつしやった時、わたくしはもうあなたに恋をいたしていました。しかしわたくしはあなたに誓います。それがわたくしに分かったのは一昨日のことでございます。あのロメエ又町の白い客間にいらつしやるのを隙見すきみをいたした時、それが分かったのでございます。

わたくしは隙見をいたしました。長い、長い間わたくしはあの硝子戸ガラスドの傍に立つてあなたを見ていました。あなたの方からは見えませんが、わたくしは暗い方にいましたからあなたをはつきり見ることが出来ました。決してわたくしが陰險な事をいたしたとか、

あなたをわな羅に掛けたとかお思いになつてはいけません。わたくしは戸を開けるつもりで戸の傍に歩み寄つて、ただちよつとあなたの御様子を開ける前に見たいと存じただけでございます。あなたは心理学者でいらつしやいますから、これがまたひどく女らしい振舞だと思ひなさいましょうね。

あの一刹那せつなにわたくしの運命は定まつたのでございます。わたくしは開けようと思つた戸を開けずに、帷とばりの蔭に隠れていました。わたくしはただいま書く事をどう書いたら、あなたがお分かりになるだろうかと存じて、それに苦心をいたします。

ピエエルさん。何よりさきにあなたに申さなくてはならないのは、あなたのお作うちの中に出て来る女とわたくしとは違ふと申す事でございます。何もわたくしが一人ひどく變つた女だと申すのではございません。わたくしはただ前りの田舎の女でございます。わたくしの母がそうであつたような、わたくしの二人の姉妹が今でもそうであるような、ただ前りの田舎の女でございます。その田舎の女とはどんな物かと申しますと、恋の実体を夫婦と云う事から引き放して考えることの出来ない女だと申すのでございます。これは多数の女のために極めて不幸な事でございます。そしてわたくしはその不幸を身に受けなくてはならぬ一人でございます。

誰やらの書いた本に、「幸福なる夫婦は極めて稀なり」と云う文句がございました。作者の名をつい忘れましたが、きつと田舎にいたことのある人だろうと存じます。

それですから行状を善くしている田舎の女は、たいてい夫婦の生活をいたしている外に、別な夢の生活を持っています。無条件にその夢に身を任せている女もあり、良心と戦いながらその夢を見ている女もありますが、どちらもこの夢の恋は *platonique* なのではないです。この *platonisme* が夢の美しいところで、それが無かったら、そう云う女は重婚をいたしているような心持がいたすでしょう。

これだけの説明をいたすのが、わたくしには一通りの骨折ではございませんでした。しかし聡明な、^{びんしょう}敏捷な思索家でいらつしやるあなたには、わたくしの思っている事は、^{ぞうさ}造做もなくお分りになりました。

あなたがまだ高等学校をお出になったばかりの青年で、わたくしの所へおいでになったころ、わたくしはその日の午後を楽しみにいたしていました。しかしもしあの時のあなたが、いつかお書きになった「若い盗人」と云う小説の中の青年の^{うち}ような早熟の人でおいでになったら、わたくしはきつとあなたのおいでをお断り申しただろうと存じます。

あなたとわたくしとの中は、夢より外に一步も踏み出さない中だと云うことが、あのこ

ろわたくしには分かっていました。あなたを夫に持つことは不可能だということが分かっていました。事によつたら、あなたを夫に持ちたくは無かったかも知れません。それです。からわたくしは二度目の夫を持ちましても、あなたの記念を流^けしたのではございません。二度目の夫を持つてからも、わたくしはやはり前の夢の続きを見ていました。

この夢があるので、わたくしは多少良心に責められたこともあります。しかしわたくしはあなたに誓います。わたくしはあなたが田舎の夫が妻に要求するような要求をなさることがあろうとは、一度も思つたことはありません。それは田舎の夫が妻に要求する主な勤め、事によつたら世間のあらゆる夫が妻に要求する主な勤めかも知れません。それです。からわたくしはあなたがパリイでどんな女とどんな事をなさろうとも、嫉妬を感じたことはございません。それはどんな貴婦人でも、どんな賤しい女でも、わたくしの夢までを奪つてしまうことは出来ないからでございます。それにわたくしには可笑しい自尊心がございます。それはわたくしが十六年前にあなたにいたしたような、はにかみながらのキスに籠もっているほどの物を、どの女もあなたに捧げることが出来まいと存じているのでございます。

わたくしはこんな夢を見て暮らしているうちに、ある日わたくしの夫婦生活の平和が瓦^が

解^{かい}してしまいました。夫が不実になったと云うことは、田舎の女のためには夫婦の破滅でございます。夫婦と恋とを引放して考えることの出来ない女のためには、そう思われるのでございます。

楫^{かじ}をなくした舟のように、わたくしは途方にくれました。どちらへ向いて見ても活路を見出すことが出来ません。わたくしはとうとう夢に向って走りました。ちようど生埋めにせられた人が光明を求め空気を求めると同じ事でございます。

わたくしは突然今の夫を棄てて、パリイへ出て、昔あなたのおいになる日の午後を待っていたように、パリイであなたが折々おいで下さるのを楽しみにして暮らそうと思ひ立ちました。どうぞわたくしを気が違つたとお思ひなさらないで下さいまし。田舎の女をわたくしの境界に置きましたら、随分わたくしと同じ思^{おも}立^{たち}をいたす女があらうかと存じます。これはただ思立つだけの事でございます。それを実行いたすとなると、どんな物になるだろうと云うことは、ロメエヌ町の家であなたを隙見をいたすまで、わたくしには分からなかつたのでございます。

隙見をいたした時の最初の感じは失望でございました。Sportで鍛錬した、強壮なお体で、どんな女でも来てみると云うお心持で、長椅子に掛けていらつしやったあなたに失望

いたしたので、昔の世慣れない姿勢の悪い青年でいらつしやらないのに当惑いたしたのでございます。それで客間に這入り兼ねていました。

その時あなたは起ち上がって戸の傍までおいでなさいました。わたくしはあなたを遺憾なくはつきり拝することが出来ました。わたくしは胸が裂けるように動悸がいたしました。そしてあなたが好きになりました。やはり十六年前の青年よりは今のあなたの方が好きだと存じました。

あなたのような種類の人、あなたのように智慧がおりになり、しつかりしておいでになって、そして様子のいいお方、そう云う人にイソダンでめったに出逢うことのないのは当り前でございます。わたくしはすぐにそう思いました。こう云う人の前に出たら、わたくしは意志も何もない物になってしまひましょう。その人が気まぐれにどうでもすることの出来るおもちゃになってしまひましょう。

そう云う運命に陥いるだろうと思つたので、わたくしは烈しい恐怖に襲われました。わたくしの心の臓は痙攣けいれんしたように縮みました。ちようどもうあなたの丈夫な、白いお手に握られてしまったようでございます。あの時の苦しさを思えば、今の夫に不実をせられたと思つた時の苦しさはなんでもございませぬ。わたくしの美しい夢はこのとき消えて

しまいました。

わたくしはどうしてもあなたにお目に掛かるまいと決心いたしました。それと同時にわたくしは思いました。わたくしがあなたを思うほど、あなたがわたくしを思つて下さるまでは、わたくしの心は永久に落ち着くことは出来まいと云うのでございます。わたくしを愛して下さいることがあなたに出来るだろうかと云うのでございます。

最初にあなたに上げた手紙に書き添えました事は嘘ではございません。わたくしは十六年前と今と格別變つてはいません。道を歩けば男の附いて来ることは昔の通りでございませす。イソダンでそうだと申すのではございませす。パリイで歩いても同じ事でございませす。しかしあなたのためには、田舎女のわたくしがなんでございませす。ほんのちよいとの間の気まぐれで、おもちゃにして下さるかも知れませんが、深い恋をして下さるうとは思われませす。それがあの時わたくしの胸に電光のように徹しました。自分の弱点を恥じる心が、嫌われるだろうと思ふ疑懼^{ぎく}に交つて、とうとうわたくしをあの場合から逃げさせてしまいました。わたくしは自分の恐ろしい運命を避けよう、どうしてもあなたにお目に掛かるまいと決心いたしました。わたくしは帽子を取つて被つて、女中にお断りを申上げるように言い附けて置いて、あの家に火事でも起つたように跡をも見ずに逃げました。

わたくしはきのうからイソダンに帰っています。主人は今晩帰るはずになっています。わたくしはもう夫に怨を申すことは出来ません。それは自分がほとんど同じような不実をいたしたからでございます。

わたくしはこれまでのような、単調な生活を続けてまいりましょう。田舎の女にはそれが当たり前なのでございます。ちらと拝しました「先生」のお姿はもう次第にぼやけてまいります。そして昔親しかった青年の姿が復活してまいります。これからまたあの十七歳の青年の人を夢に見て、それを楽しみにいたしましょう。

ピエエルさん。さようなら。もうまたとお目に掛かることはございません。どうぞ悪く思召さないでわたくしの事を御記憶なすつて下さいまし。わたくしはあなたに無窮の愛を捧げます。

どうぞもうお手紙も下さいますな。世に忘れられた片蔭に、小さい田舎女は、ただあなたを一人をたよりにして生活していきましょう。

ピエエル・オオビュルナンとマドレエヌ・ジネストとは再会せずじまつた。この詭遇きぐうの影に傷けられた、大家先生の自負心の創痕はいつか癒えて、稀にはあるが先生が尊重の情をもつて少時の女友達の上を回想することもある。

鎖鑰さやくを下した先生の卓の抽出しの中で、二通の手紙が次第に黄ばんで行く。それを包んだ紙には「田舎」と題してある。

青空文庫情報

底本：「諸国物語（上）」ちくま文庫、筑摩書房

1991（平成3）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鷗外全集」岩波書店

1971（昭和46）年11月～1975（昭和50）年6月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2007年12月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

田舎

マルセル・プレヴォー Marcel Prevost

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>